

勝林寺寺報



むずかしさを身にしみて思いなげかなればならないのは何としたことでありますか。

このように孝行・善徳の出来ない私、慈悲などという他を利益することも出来ない私であるからでしょう、いまこの二首のご和讃が、もつたいなくひびいてくださるのです。あゝやはり、「極樂」といわれる世界は、このゆえに「極樂」なのかと、私なりにうなづかせていただくのです。

「安樂淨土にいたるひと
五濁惡世にかれりては
利益衆生はきわもなし。
五濁惡世にかえりては
利益衆生はきわもなし。

神力自在なることは
測量すべきことぞなき
不思議の徳があつめたり
無上尊を帰命せよ。

人の子である以上、親に孝行でありたいと願わぬ者はいないはずです。にもかかわらずこの世の孝行は、「したい時には親はなし」の手遅れであつたり、また孝行のおしつけでかえつて親を苦しめたり、または見栄外聞・名利のため親を利用した孝行であつたり。すべてこの世私たちの孝行・善行・奉仕・供養なるものは、まやかし・いつわり・へつらいにしかぎないこと悲しく思います。「虚偽不実ノワガ身ニテ」と親鸞さまはおなげきになりました。

人の親であるなら、だれ一人として、子どもにあわせを願わない者はいないはず。にもかかわらずこの世私たちの愛や慈悲は、願い通りの結果をうることはまれであるし、また、しばしば「かわいさ余つて憎さ百倍」愛が憎しみにかかることがあるほどです。「今生ニイカニイトオシ・フビント思ウトモ、存知ノゴトク助ケガタケレバ、コノ慈悲始終(一貫性)ナシ」と親鸞さまはお悲しみなさるのです。

五濁惡世といわれる現代ほど、その「供養」ということ、その「慈悲を行ずる」ということ

いう、根源根本の願いとそれはたらき(本願力)によつて仕上がつてゐる世界です。

いま、お淨土に参るということは、その本願力のなかにからめとられ、如來真実清浄のいのちのなかに生れかわつたことです。「超出常倫」・常識知識を超えた如來さまのいのちのなかで私たちは始めて清浄な供養と眞実の慈悲を生きることができます。

人を尊びうやまう行為を行ないなすんでいる人。人を愛しいつくしむことの苦しさのただなかにいる人。不可思議の本願力を憶念し、無上尊阿彌陀如來の淨土を仰ごうではないかと親鸞さまはおすすめくださいます。

「反省」



悪いことは何もしていらないと思つてゐるときこそ、必要なのです。

悪いことをしたと思ったときにだけ、するものではない。

人をおうやまにする行為(諸仏供養)が、また人をいつくしみたする行為(利益衆生)が何のゆがみや抵抗やわだかまりもなく「きわもなく」「自在」に行なえるということは何とすばらしいことでしょうか。

そういう意味でやはり「極樂」であるのだと思わせていただくことです。

ともあれ、これは、いわゆる常識や並の知識では考えられることです。

どこのどんな人でも、お淨土へ参るやいなや、自利利他円満・自由自在に人をうやまの人をいつくしむ、如來さまと等しい「普賢の徳」をうるなどとは、とうてい考えもできない「測量すべ

葬儀	
八月九日	片間 藤田秀吉様
八月二十八日	上小田田村その様

九月のこよみ

一日 出石組寺族婦人研修会(本覚寺)組同朋講座

二日 田村輝夫氏宅初七日

四日 近畿プロツク寺族婦人研修会(和歌山)

五日 同

六日 出石組代研修会(勝林寺)・永井淳一庄法事

七日 東端地区門徒組代研修会講話(西脇)

八日 近畿地区法華推進講習大会(大阪)

九日 玉田金定例

十日 阪神東東組「連研」講師

十一日 水嶋元三氏法事・成田武夫氏法事

十二日 多田穂氏法事

十三日 本山専門部会

十四日 藤田忠男氏宅忌明。みのりを聞く会

十五日 出石組「連研」(食事会)

十六日 二十九日 教区寺族婦人講法研修旅行(福井)

十七日 二十七日 同

十八日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

十九日 三十日 同

二十日 二十九日 藤田忠男氏宅忌明。みのりを聞く会

二十一日 出石組「連研」(食事会)

二十二日 二十九日 教区寺族婦人講法研修旅行(福井)

二十三日 三十日 同

二十四日 二十九日 藤田忠男氏宅忌明。みのりを聞く会

二十五日 三十日 出石組「連研」(食事会)

二十六日 二十九日 教区寺族婦人講法研修旅行(福井)

二十七日 三十日 同

二十八日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

二十九日 三十日 同

三十日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

三十一日 三十日 同

三十二日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

三十三日 三十日 同

三十四日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

三十五日 三十日 同

三十六日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

三十七日 三十日 同

三十八日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

三十九日 三十日 同

四十日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

四十一日 三十日 同

四十二日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

四十三日 三十日 同

四十四日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

四十五日 三十日 同

四十六日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

四十七日 三十日 同

四十八日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

四十九日 三十日 同

五十日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

五十一日 三十日 同

五十二日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

五十三日 三十日 同

五十四日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

五十五日 三十日 同

五十六日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

五十七日 三十日 同

五十八日 二十九日 田村輝夫氏宅忌明

五十九日 三十日 同



つきあい宗教



「自分自身をより処にしなさい。自分以外のものをより処にしてはなりません。私の説いた法・真理をより処としない、それ以外のものをより処としてはなりません」

お釈迦さまのご遺言（ゆいごん）でした。

当時のインドでさえ、「自分自身」はそつちのけで、わけのわからぬ偶像（勝手につくりあげた）神を、おがんでいた人が多くいたから、お釈迦さまはそれを心配なさつてご遺言なさつたのでしよう。

「自分そつちのけの宗教」しかしそれは、ひよつとしたら、昔のことではないのではありませんか。

日本の多くの宗教。家や村や町を護つてくれるという神を祭ること。また、家や村や町や国にタタる神を鎮（しづめたい）と祭ること。

とにかく昔からの土地の習慣・習俗として、また時にはおきてとして、集団で、みんなでいつしょのおつき合いで、おがまなければならぬい。それが宗教というものだと思い込んでいます。

日本の國の統治者の神、あるいはそれに奉仕した者だけを神に仕立てあげて、とにかく國民であれば義務・つとめとしておがみなさいといふ主張が、今でも横行しています。

親せきのつき合いとして、家の祖先をまつることが、それが法事という宗教だと思つています。一人一人の氣ままや勝手は許されません。

「自分自身」はころさなければなりません。

滅私報公として、村民として、この家すじの者として、みんなで、そろつて、おつき合いして、みんなで、そろつて、おつき合いしている間

八月二十一・二日は、勝林寺子ども研修会でした。

坪口 中嶋由佳



子ども研修会

ありがとう

ございました



第二十一回勝林寺子ども研修会をしました。子どもたちから沢山お礼の手紙がきました。とてもうれしうございました。ご協力下さった会員の皆様に感謝します。仏婦会長

先日の子ども会には、たいへんおせわになりました。ありがとうございました。ゲームなど、とてもおもしろかつたです。『ウベーリの出家』のビデオ、たいへんためになりました。ぼくもがんばります。楽しい年もぜつたい行かせてもらつて賞状をもらいます。

小谷 宮嶋篤志

いろいろとありがとうございます。

坪口 千葉紀

最後の「工作」は、美しいかごつくりでした。が、私はあまりうまく作れませんでした。閉会式のとき、私は五回目の参加だったので表彰状と記念品をいただきました。

庭のすみに何本も立てかけてあるすり切れ桜を見るたびに、私はチユラパンダカのことを考えてみるのです。（勝林寺テレホン法話）

佛法にはよろず悲しきにも、かなわぬにつけても、何事につけても、後生の助かるべきことを思えば、よろこび多きは 佛恩なり

（「蓮如上人御一代聞書」）

に、あなた、またぞろとんでもない方向につれていかれはしませんか。

かつての日本は、そんな宗教のなかで、あのお金らしい戦争にのめり込んでいったのですよ。

「自分自身をより処にしなさい。自分以外のものより処にしてはなりません」

お釈迦さまのご遺言（ゆいごん）でした。

当時のインドでさえ、「自分自身」はそつちのけで、わけのわからぬ偶像（勝手につくりあげた）神を、おがんでいた人が多くいたから、お釈迦さまはそれを心配なさつてご遺言なさつたのでしよう。

しかしそれは、ひよつとしたら、昔のことではないのではありませんか。

「自分そつちのけの宗教」

問いかけてください。自分がなにかにいたまでは、いましめていてくださるのです。

（勝林寺テレホン法話）

最初の日、十二時半から受付が始まりました。婦人会のおばさんも合して約三十五・六人で、いつもの年より少なかつたし、しかもほとんど知っている人ばかりで、新しい友だちはできなかつたことが少しがつかりしました。

子どもたちは九人ばかりの班に分かれました。A・B・Cの三班でした。

まず、ごいんげさんに「お寺のはなし」をしてもらいました。『バク』鉄と人のみる夢をたべるのだという話。目を開けてしつかり

お話を、おつとめのけいこや、うたのれんしゆうのあいだに、いろいろなゲームをやりました。すこしむずかしいゲームもありました。

おやつはアイスクリーム。夕食は婦人会のキヤンドルサービスなどがあつて九時半まででした。男の子で三べんおかわりにちようせんした人もいたほどおいしかつたです。

夜がたいへんでした。おばさんがつくつてくださつたカレーライスでした。男の子で三べんおかわりにちようせんしたのに、うれしくて、たのしくて、しやべつたのに、うれしくて、たのしくて、しやべつたりはしやいだりで、あまりねむれませんでした。

二日目の朝、掃除・体操のあと、お城山に登りました。朝のおつとめのとき、ごいんげさんにチユラパンダカのほうきの話をし聽いて、掃いて掃いて、そして仏法を悟つたときのことを見えるように論されました。

そのチユラパンダカにお釈迦さまは筆をお与えになりました。それから毎日日々ひたすらに一所懸命に書き清めました。そして何か月か、チユラパンダカは

筆でもつて掃くこと、筆で掃いてそこらあたりをきれいにする

ことを覚えるように論されました。

チユラパンダカは、お釈迦さまからいた一本の筆で、それから毎日日々ひたすらに一所懸命に書き清めました。そして

チユラパンダカが、掃いて掃いて、そして仏法を悟つたときには、おそらくお釈迦さまからいたいたい筆は減つてちびてもう

使いものにはならなくなつてははずです。それでもチユラパンダカは、それからもそのちびた筆を、死ぬまで大切にしたのでは

ないかと思います。

チユラパンダカが、掃いて掃いて、そして仏法を悟つたときには、なぜかといつて、チユラパンダカは、このちびた筆に仏法を見

来ました。お釈迦さまからいたいたい筆は減つてちびてもう

掃いても掃いても次から次に散つてくる木の葉を掃き、ちらりを

拭き、ころをぬぐい。衆生の尽きない煩惱罪業のごみを、「救わ

すんば正覚（しょううがく）とらじ」と、わが身わがこころをすり減らしていくくださるお釈迦さまのおところを、チユラパンダカは

知つたのであります。

朝 竹簾（たけぼうき）で掃除をします。

最近は、コンクリートやアスファルトをいであるところが多くなつたからでしょうか。竹簾の寿命がとても短くなつたよう

に思います。一月とは持ちません。

すり減りちびた竹簾が何本も庭のすみっこに立てかけてあります。

そのちびてしまつた竹簾を見て、私はいつもチユラパンダカのことを思います。

（「蓮如上人御一代聞書」）